

## 令和6年度実地調査の講評内容について

No.	項目	講評内容
1	多様な利用者への配慮について	・外国語対応については順次されていくとのことだが、これからますます多様な方が博物館を利用するので、そういった方に対応できるように点字や音声ガイドの対応についても今後していくと良い。
2	キャプションについて	・キャプション類の字が多く、文字が小さくなってしまっている。字が小さいと読みにくいと思われる方も多くいるので、少し字を減らして文字を大きくすべき。
3	埋蔵文化財資料について	・所蔵資料リスト上は、埋蔵文化財資料も博物館資料扱いをされている一方で、埋蔵文化財資料は箱単位で管理されている。作業場等は厳密に区別されていたのでそこは問題ないと思うが、写真室や展示で一緒になるということはある。例えば展示に耐えうるレベルのものだけ博物館資料として登録して、あとは埋蔵文化財資料として一括で扱うなど、取り扱いは分けたほうが良い。
4	職員の業務分担について	・学芸員が埋蔵文化財と博物館両方の業務を担当しているが、埋蔵文化財の業務が繁忙期になってくると博物館の考古資料の担当が確保できない事態が生じてしまう。例えば年度ごとに博物館業務の担当と文化財業務の担当を分けるといった体制が、博物館の運営や資料の管理という面から言うと考えられるのではないか。
5	収集方針と資料管理・学芸員の配置との関係性について	・資料収集方針において、原則として刈谷市の歴史・考古・民俗に関する資料を収集するとされている一方、所蔵資料リスト上の分類は歴史・古文書・考古となっていて、収集対象と一次資料の分類が一致しておらず、わかりにくい。 ・また、収蔵資料に対応する学芸員、特に民俗専門が不在。民俗資料、民具は膨大な量がこれから増えていく資料なので、民俗の学芸員を増やしていく、あるいは歴史の学芸員により幅広い経験をさせて、民俗も網羅できるようにしたほうが良い。
6	入館者数の目標値について	・入館者数の目標値について、刈谷市のような中核的な都市であればもう少し高い水準に設定し、それを目指した事業を検討しても良いのではないか。